名古屋柳城短期大学
ちゃぺるにゅーす
第17号（クリスマス号）
2009年12月20日

「三重の問い」

村田　康常

今年、アメリカのボストン美術館から、一枚の絵が来日しました。名古屋の美術館でも公開されたその絵には、３つの言葉が書き込まれています。

われわれはどこから来たのか。

われわれは何ものか。

われわれはどこに行くのか。

フランスの画家ゴーギャンが、タヒチの島で描いた作品です。ご覧になった方も多いでしょう。ゴーギャンは、この作品を、文字どおり心血をそそいで描きあげました。麻袋を切り開いて貼りあわせ、アトリエいっぱいのキャンバスを作り、そこにタヒチの自然を舞台にしたさまざまな人物像を描いています。この作品の主題が、絵の隅に書きこまれた上述の３つの問いです。ゴーギャンは、パリの華やかな文明社会をはなれ南海の島々をさすらい、孤独のなかでこの問いを問いかけました。そして、旧約聖書の創世記にある禁断の木の実のモチーフをもとに、タヒチで出会った土着の宗教や、人々の日常生活、誕生、老い、死を描いて、現代社会の奥底から響いてくるこの３つの問いを見事に描きました。

ポール・ゴーガン「我々は何処から来たのか、我々は何者か、我々は何処へ行くのか」ボストン美術館蔵
Tompkins Collection — Arthur Gordon Tompkins Fund, 36. 270 Photograph © 2009 Museum of Fine Arts, Boston. All Rights Reserved. c/o DNPartcom

この絵を前にして、私たちは、彼と同じ問いを問い直さずにはいられません。

わたしたちは何もので、どこから来て、どこに行くのでしょうか。

わたしたちも、ゴーギャンのように孤独のなかで、こんなふうに問いかけるときがあるかもしれません。人生の転機のなかで、不安におそわれたときに、あるいは、ふと自分の生き方を振り返ってみたときに、この問いが浮かんでくるかもしれません。自分は何ものだろう。どこから来て、どこに行くのだろう。

答えが見えなくて、ますます不安になることもあるでしょう。

しかし、もう一歩、この問いに踏み込んでみてください。

わたしたちは、こんなふうに問いかけるとき、いったい誰に問いかけているのでしょう。

〈誰か〉にむかって、わたしたちは問いかけているはずです。言いかえると、わたしたちの問いを受けとめてくれるものがあるとわたしたちは知らず知らず感じています。この問いの先には、わたしたちの存在を超えた〈誰か〉がいます。このことに気づいたとき、この問いは、孤独のなかで不安にかられて問いかける答えのない

問いではないということが、分かると思います。わたしたちの問いを受けとめてくれる大きな存在があるということが、ぼんやりとではあっても、感じられるのではないでしょうか。すべてをあらしめ、すべてを受けとめる大きな存在の息吹を感じるでしょう。わたしたちは、その存在にむかって「あなた」と呼びかけ、問いかけることができるのです。

「あなたの天を、あなたの指の業を／わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。」(詩編8:4-5)

わたしたちを超えた大きな存在、この世界の一切をあらしめた大きな存在など、そもそもあるのでしょうか。けれども、視点をひっくり返してみましょう。そんなありそうもないほど大きな存在から見たら、そもそもわたしたちは何ものなのでしょうか。そのような存在から見れば、わたしたちは取るに足りない小さな小さな存在かもしれません。ほとんどないに等しいかもしれないのです。でも、あの大きな存在は、その小さなわたしたちの一人ひとりを心に留めて、受けとめてくれると旧約聖書詩編の詩人は歌います。

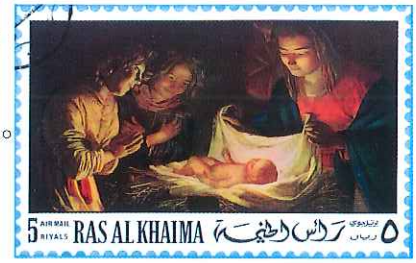
わたしたちが「あなた」と呼びかけていく大きな存在がわたしたちを超えたところにあり、その存在が私たちの一人ひとりを心に留めてくれる。それが感じられたとき、「わたしたちは何ものか」という問いは、答えのない孤独な問いではなく、わたしたちを受けいれてくれる存在への呼びかけになります。そこに、祈りがあります。

では、そんなわたしたちはどこから来たのでしょうか。

わたしたちはみんな、それぞれの苦難と危険をくぐって、今、ここまで来ました。けれども、わたしたちが苦難や不安、危険のなかにいるときには、いつも、目に見えない大きな存在が一緒にいて、わたしたちの足元を支えてくれています。わたしたちがどこから来て今、ここにいるのかというと、まさにその支えとなっている大きな存在からなのだと思います。

そのことは、どうやって分かるのでしょう。すべてを支えて受け入れてくれるその目に見えない大きな存在が、わたしたちのあいだに希望の光となって愛の結晶を送ってくれた出来事が、２千年前にありました。暗い夜に世界中を照らす光が、人間のもっとも貧しく、もっとも目立つことなく、もっとも弱い状況のなかで産声をあげました。その夜、貧しい羊飼いや異国の賢者たちが暗闇の光に導かれて集まってきて見出したのは、宿屋の粗末な馬小屋の飼葉桶のなかに寝かされていたひとりのおさな子でした。その夜、世界中が、誰も気づかいないまま、ひとりのおさな子を真ん中にして、暗い闇のなかから愛の光を見つけて歩みはじめたのです。

わたしたちが、今、クリスマスに祝うのは、このことです。わたしたちが、暗い夜のなかで、愛と希望の光を見出し、おさな子を真ん中にして、その方に導かれ促されて歩みはじめたことを、わたしたちは今も感謝し、祝っているのです。わたしたちが何ものであっても、わたしたちを心に留めてくれる大きな存在があります。その愛の光は、ひっそりと飼葉桶に寝かされているおさな子によってわたしたちの目に見える姿となりました。わたしたちは、立派な神殿でも巨万の富でも偉大な皇帝でもなく、飼葉桶のおさな子を真ん中にして、貧しい者や救いを求める者たちが静かに集まったあの場所から、闇のなかに光を見出して歩みはじめ、その歩みの果てに、今、ここに来ているのです。そして、毎年めぐりくるおさな子の降誕祭のたびに、くりかえしあの場所に立ち返って、またそこから歩みはじめるのです。わたしたちが祝うクリスマスには、きっと、そんな意味があるのでしょう。



創立記念礼拝報告

高瀬　慎二

10月31日（土）に創立記念礼拝が行われました。今年度は学生への新型インフルエンザ感染防止のために、第１部と第２部のメイン会場をチャペルと体育館の２箇所に分け、相互に同時中継を行うこととなりました。第１部では、市原信太郎チャプレンの司式の下、創立記念礼拝を行いました。また、司式の中では野村潔司祭の祝辞、新海英行学長の式辞が述べられ、永年勤続者２名（原孝代元理事、南川たか子先生：附属三好丘聖マーガレット幼稚園教諭）の表彰が行われました。

創立記念礼拝の様子

第２部では、附属三好丘聖マーガレット幼稚園の先生方をお招きして、附属幼稚園に伝わってきた遊戯を実演していただきました。第２部の内容は、以下の通りでした。

創立記念礼拝第２部の内容

1. ご紹介（尾上明子教授）
2. 平松ちづ代園長の挨拶
3. オウム（模倣あそび）
4. 汽車（表現あそび）
5. 玉かくし（フレーベル第１恩物のあそび）
6. 大きくなれよ（感覚あそび）
7. さんぽ（手遊び）

遊戯を行う附属幼稚園の先生方

附属幼稚園の先生方には、学生を巻き込み一緒になって遊戯をしていただきました。学生たちも楽しみながら柳城の伝統の遊戯に触れる機会を持つことができ、こうしたことを通して未来へと柳城の遊戯、伝統が受け継がれていくものと思います。

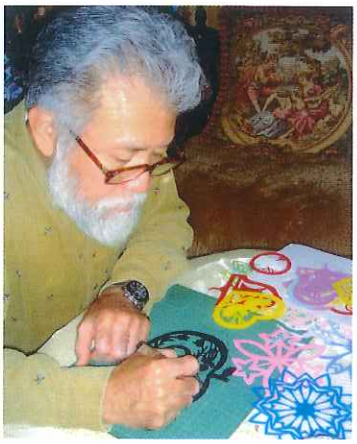
午後からは、日本聖公会中部教区の共同墓地まで赴いて、ヤング先生をはじめとする柳城学院関係者の墓地礼拝を執り行いました。

市原チャプレンによる墓地礼拝

墓地礼拝の様子

簡単で楽しい切り紙クリスマスオーナメントを作って楽しもう

遊び・ものづくりクリエイター　**夏目　恒雄**



＊夏目先生のご紹介＊

2008年度まで本学で長年お勤めになった夏目先生（体育原理、子どもの生活・文化）は、楽しい子どもの遊びやペーパークラフトの研究をなさってこられ、ゼミの学生にも教えておられましたが退職されてからは、ますます製作意欲を持ち趣味の世界に没頭されているようです。「キリスト教保育」の授業では、先生をお招きし、クリスマスの楽しくて美しい作品の数々を教えていただきました。このコーナーでは、その一端を先生の解説でご紹介いたします。

準備するもの

① 基本デザインを描く用紙（今回は上の図案をコピーして作ります）

② 切り紙オーナメントとして仕上げたい色の用紙（あまり厚いものでなく180g／㎡前後程度が切りやすい）

③ カッターナイフ（デザインナイフなど刃先が30度のもの又は細身のカッターナイフ）

④ カッティングシート（作業時の下敷きになるもので専用シートでなくても可）

⑤ ハサミ（単純な輪郭など必要によって使用）

⑥ ホッチキス

⑦ 糸（薄い色かオーナメントの紙と同じ色）

⑧ 木工用のボンド

⑨ 妻楊枝１本（ボンド付けの作業で使うと便利）

作り方

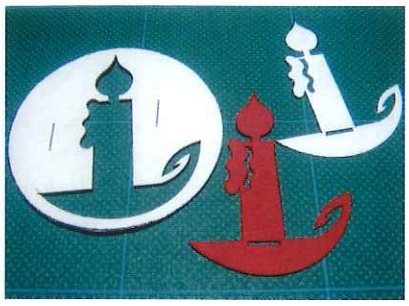
1）図案を、仕上がり寸法８㎝程度になるようコピーする（1.5～2.0倍程度）。

2）オーナメント仕上げ用紙にコピーしたものをホッチキスで留める。

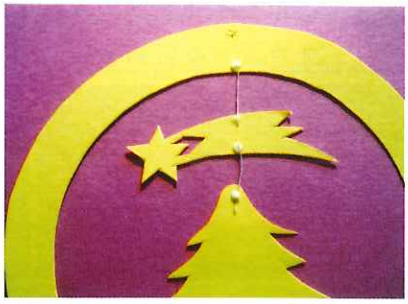
3）図案の中央の細かい部分からカッターナイフで切り始める。

4）モミの木とキャンドルは外枠の円と独立しているので、内側を切り取ってモミの木、キャンドルを切り取る。切り取ったものは出来上がり写真のように、外枠の円とボンドを使って糸で吊す（黒点の位置）。

5）ボンドは妻楊枝を使って、目立たない「点」になるようにすると美しくなる。図案中の黒点は吊しの位置を示す。

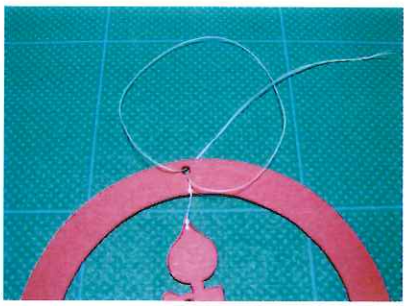


4）内側を切り取って切る



5）ボンドを付ける

6）最後に外枠用の○穴に糸（20cm 位のものを輪にしたもの）を通して完成。



6）糸を通す

カッターナイフの使い方

1）カッターナイフは手前から手元へ、左から右へ（左利きは逆）引く。また切りにくい時は紙の方を動かして切る。

2）図案を描いた紙と仕上げ用紙の２枚が重なっているので、この２枚を切る意識を持ってカッターナイフを押しつけながら切る。この時ナイフを立てると紙の繊維の抵抗が強くなり切りにくくなるので、切る方向に45度以下に倒して作業をすると良い。

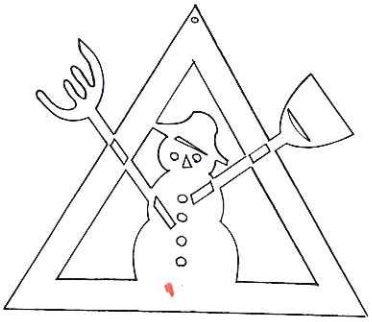
3）美しく仕上げるには、切り始めの始点の奥（下）までナイフの先を押しつける意識を持つ。また終点はナイフが斜めになっているから、重なっている下の用紙は終点まできちんと切れないのでナイフを立ててしっかりと切ることを確認する。 あるいは、終点を始点と同様のナイフの入れ方をすることで切り取った跡が鋭利に、美しく仕上がる。

4）外枠の穴や小さな円は、刃先を利用し八等分に切り込みを入れてカットするとほぼ円に見える。ポンチを使えば簡単。

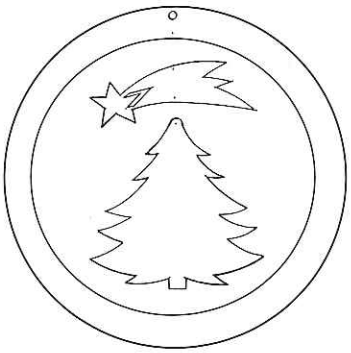
完成

デンマークモビール・ウロ代表
田尻知子氏の指導を受けた作品

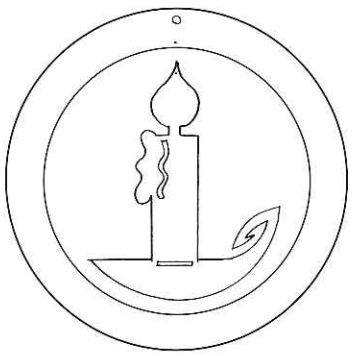
雪だるま



モミの木



キャンドル



※ご自分の好きな大きさに拡大して下さい。

水曜日の礼拝から

10月28日　長谷中 崇志 先生

一人ひとりの「おもい」に寄り添った関わりを大切にできる保育・福祉専門職

今日は、私の人生の中で今でも忘れることのできない心に残っている出来事をいくつかとりあげながら、みなさんが将来、保育・福祉専門職に就かれた時に、大切にしてほしいと思うことを話したいと思います。今日、私が皆さんに伝えたいことは、みなさんがこれから保育・福祉専門職としてかかわる人、子どもやその親・保護者、高齢者、障害者などのクライエント一人ひとりの「おもい」に寄り添った関わりを大切にしてほしいということです。

まず、私が人の「おもい・価値観」を大切にした支援にこだわるようになった私自身のいくつかの体験を話します。

一つ目は、児童養護施設に入所しているA君との出会いです。当時、A君は、本当は両親との生活を強く望んでいたけれど、それが叶わず、とてもつらいおもいで施設において生活をしていることを知りました。私は、この出会いを通して、A君にとって親と離れて施設入所をした方が良いと判断した専門家の考えと、どんなにつらい状況でも親と一緒に生活をしたいというA君のおもいとのギャップを知り、専門家の判断とクライエントのおもいにはズレが生じる可能性があるということを実感しました。つまり、専門家としてA君にとって良かれと思って支援したことが、実は、A君にとってはとてもつらいことでしかなく、援助したけれど、クライエントにその思いが伝わっていないという「援助錯覚」が起こる可能性を専門職は常に自戒しないといけないということを痛感しました。と同時に、理想であり、難しいことかもしれないけれど、クライエントの幸せの実現にむけて、クライエントのおもいを尊重し、専門家のおもいとのギャップを一つ一つ埋めていくことの大切さを学びました。

次に、学生時代におけるBさん（重度の身体障害者）との出会いです。Bさんと日常生活について会話する中で、Bさんから「あなたはうらやましい」と言われました。Bさんは、「私は、自由に息を吸ったり吐いたりすることもできない、寝返りさえ自由にすることができない、寝言さえ自由に言うことができない。勉強なんてしたくてもできない。とてもうらやましい」と言うわけです。私はその時、人の価値観は、その人の立場や生活状況によって様々であり、価値観の多様性を自覚しました。

また、祖母の延命治療の体験を通して、人の価値観は立場によって、また時間とともに変わるということを実感しました。ある日、祖母は意識不明の寝たきり状態になってしまいました。医学的にはもう意識回復の見込みはなく、延命治療によってしか生きる道はありませんでした。つまり、延命治療によって生かされる状態を選択するかどうかを迫られたわけです。私は当時、もし、延命治療を行う必要性が自分や家族に生じた場合は自然死を選択しようと考えていました。しかし、実際に家族がそのような状態になった時、「回復の見込みがなくても、それでも延命治療を行ってほしい」という気持ちになり、その後亡くなるまで延命治療を行ってもらいました。もちろん、この選択が正しかったのかどうかは今でもわかりません。ただ、この出来事から、私は、人の気持ち・価値観はその人の置かれた状況によって、また時間とともに変わるものであり、人の気持ちに寄り添った支援の大切さを改めて強く実感しました。

これらの出来事から（もちろん、それらだけではありませんが）、私は、福祉専門職には、クライエント一人ひとりの価値観・おもいを基盤にした支援が大切であるということを強く意識するようになりました。

ただし、誤解のないようにしてほしいのですが、クライエントのおもいだけに基づいた支援が良いと言っているわけではありません。今日、保育・福祉の支援において大切なこととして、Evidence-based Practice（根拠に基づく実践）が大事だということを以前の講義で述べたことがあるかと思いますが、科学的な根拠に基づいた実践も大切になってきます。もちろん、科学的な根拠に基づく実践は大切です。しかし、他方において、人間は感情をもった生き物であり、価値観は一人ひとり異なります。このEvidence（根拠）という言葉にはもう一つの意味があり、その人のおもい・意向（価値）といったその人の主観的な側面を根拠として実践していくという意味も含まれています。つまり、科学的な根拠だけで判断するのではなく、数字には表れないその人の悩み、苦しみ、希望といった一人ひとりのおもいも大切にし、その人のおもいに寄り添いながら支援を行っていくことを大切にしていこうというわけです。

皆さんがこれからかかわる子どもや親・保護者、高齢者、障害者などのクライエントは様々な生活問題を抱えています。そして、それらの問題を解決していくうえで、科学的な根拠をよりどころとするのか、あるいは、クライエント自身のおもいをよりどころとするのかによって判断が変わってくることがあります。上田敏先生の言葉を借りれば、専門家が判断する時には、専門家からみた「客観的障害」への支援だけを行うのではなく、その人が抱えている悩みや苦しみ、痛みなどその人の「主観的障害」としてのニーズにも焦点をあてて支援を行うことが重要だといえます。

ぜひ、皆さんには、その人のおもいを大切にし、その人のおもいに丁寧に寄り添いながら必要な支援を展開できる専門職になってほしいと思います。皆さんを必要としている人、皆さんだからこそ救える子どもや人がたくさん待っています。難しくても、あきらめず、一人ひとりの思いを大切にできる専門職になってほしいと期待しています。ご清聴ありがとうございました。

フィリピンにおける台風被害

すでに日本では忘れ去られた過去の話になっていますが、９月から10月にかけて大きな台風がいくつもフィリピンを直撃しました。台風16号（現地名Ondoy）は主としてマニラ等のルソン島中部地域に、台風17号（現地名Pepeng）は主としてバギオ等のルソン島北部に大きな被害を与えました。特にPepengは、続いて誕生した台風18号との力関係などから、1週間近くルソン島北部に停滞し、バギオに1856㎜ という記録的大豪雨をもたらしました。これはバギオの10月の平均月間雨量462㎜の４倍に上ります。この結果、山岳地域であるこの地方の各地で地滑りなどの土砂災害が発生し、多くの人的・物的被害をもたらしました。

特に被害の大きかった、ラ・トリニダード（バギオの北にある町）で懸命に救助活動にあたる人々

このルソン島北部地域は、わたしたちの属する中部教区と姉妹教区であるフィリピン聖公会北中央教区の管轄でもあり、被害発生直後から情報が入ってきていました。不幸中の幸いとして、柳城生が毎年訪問していた地域ではほとんど人的被害はなかったのですが、教区内では多くの方々が被災し、一つの教会（聖アイダ教会）が地滑りにより完全に流されたほか、各地で亡くなった方も多数おられました。また、教会が地域の避難所として使用され、ある教会では６家族29名が避難生活を送ったとのことです。

聖アイダ教会があった場所。何も残っていない。

柳城では、当初考えていたような形では現地から援助の要請がなかったことから、直接的な募金等は行いませんでしたが、11月8日の聖マタイ教会のバザーで柳城生有志がフィリピンバーベキューと豚の角煮（保育専攻伝統の味！）を販売し、売上金を現地への援助のために献金しました。

バザー模擬店の様子

今年度のクリスマス献金の奉献先の一つは、このフィリピンの台風被害の被災者の方々です。現地のパチャオ主教からわたしたちへの第一の要請は、「どうかわたしたちのために祈り続けてほしい」でした。直接的に何かをすることができないときにも、祈りと捧げ物を通して、フィリピンの方々、そして世界のさまざまな地域で多くの困難の中にある方々とつながることができることを信じ、クリスマス礼拝、そして席上献金を心からお捧げしたいと思います。

報告　市原信太郎

「世界のクリスマスと絵本展」ご案内

2009年12月1日（火）～2010年1月15日（金）

図書館・歴史資料室

み子のご降誕を心よりお祝い申し上げます!!

今年も、本学恒例となったクリスマス展の季節がやってきました。クリスマス展を見ていただくと、キリスト教世界の人々がイエス様の誕生をお祝いするために様々な工夫を凝らしていることを知ることができます。それは、伝統や文化を色濃く反映した降誕人形であったり、ローソクの上昇気流を生かした光のピラミッドであったり、とても楽しく可愛らしいものたちです。本学のささやかなコレクションも少しずつ増えつつあります。今年は、特にイタリアのプレセピオ（降誕人形）のセットが加わりました。マリア・ヨセフ・赤ちゃんイエスをはじめ、三人の王様（占星術の博士）、羊飼い、そして、家畜たち（あひるや牛羊やろばなど）の数の多さはとても嬉しい驚きです。また、図書館のクリスマス絵本は、数多い絵本のなかから選りすぐり、皆様に見ていただきたいものばかりを展示しました。ぜひ、ご覧いただきたくご案内申し上げます。

世界のクリスマス切手から

ポーランド

ニュージーランド

イギリス

イタリア

フィンランド

リヒテンシュタイン

クリスマス献金先

皆様からの尊い献金は以下のところへお捧げします。

☆フィリピン台風被害支援
☆アジア保健研修財団
☆笹島キリスト教連絡会
☆岐阜アソシア
☆国際子ども学校
☆キリスト教保育連盟
☆聖公会保育連盟
☆ひだまりの里
☆中部教区センター

2009年12月20日発行　第17号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所　株式会社　丸和印刷